

関わり合いを持たない風景は生命を失い、無味乾燥な一枚の絵に過ぎない

野田知佑『日本の川を旅する』

自分の腕を信頼して、毎日何度か危険を冒し、少々シンドくて、孤独で、海賊のように自由で川下りの旅には、男の望むものがすべてある。北海道から九州まで、全国の14本の川をカヤックで旅した物語。

(「BOOK」データベースから転載)

この本をきっかけに野田さんに憧れて、僕がフォールディングカヤック（折りたたみ式カヌー）を買ったのはもう 30 年以上前になる。あちこちカヌーを浮かべて、川を下った。某アウトドアショップのツアーで十勝川を下ったこともある。その後、僕は当時勤めていた学校の校長先生に異動希望を聞かれて「川と湖のあるところ」と答えて笑われた。そのおかげかどうかわからないけれど、半年後、然別湖と十勝川に近い鹿追高校への異動が決まった。嘘のような本当の話。この本は僕の人生を大きく変えた一冊なのだ。

カヌーの旅は、ぼく自身がいつもむき出して風雨の中にさらされて移動するから、あらゆるものがヒリヒリと肌に沁み込む。人も木も草も動物も魚もドカンとぼくにぶつかってくる

野田さんはカヌーの旅の魅力をこう語る。実際カヌーを浮かべるとまず視線が低いことに気づく。よくアメンボの視線とたとえられるが、今まで遠くから眺めるだけだった川や湖が俄然、自分に迫ってくる。「無事陸に戻ることはできるのか」というような恐怖に似た感情にも襲われる。そう、そこは非日常の世界なのだ。全身が危険を察知するべく敏感なセンサーと化す。

そもそも僕たちの普通の生活に川は、ほとんど関わりがないものになってしまっている。僕自身「川は危険だから近づくな」と教わってきた。実際、川の流れは見た目以上に速く、圧力は半端じゃない。増水した川に近づいてはいけないのは当たり前だが、そうでなくても川に入る場合はライフジャケットは必須。川の自然の素晴らしさも、逆にその怖さも、僕たちにはすっかりわからない未知の世界になってしまっているのではないだろうか。野田さんはこんなことを言っている。

関わり合いを持たない風景は生命を失い、無味乾燥な一枚の絵に過ぎない

これは川に限ったことではない。山でも海でもそうだし、郊外に広がる田園風景もそうだろう。何かしら関わることで風景は変わって見えるものだ。だからぜひ一度、川側からこちらの世界を眺めるとよい。そこは人の生活と自然のせめぎ合いの最前線のように僕には思える。普段目にするのでもない川に驚くほどの自然が息づいている。カワセミが小魚を捕る姿を見たかと思うと、その一方で、人里近い川岸には冷蔵庫やら自転車などが捨てられている。登山は人を哲学者にするというけれど、川下りは人を文明批評家にしてくれる。

昨年、久々に然別湖にカヌーを浮かべた。昔と比べてなんと野営場に人の多いことか。そしてカヌーを浮かべて楽しむ人が随分と多くなった。僕が愛艇を組み立てているのを見た人が「おっ、フジタの名艇ですね」と声をかけてきた。うんうん、わかる人にはわかるんだ。おぬしもやりおるな、という具合にあたかも僕は昔からのプロだという雰囲気をかもしだしながら余裕かまして話をする。実はこのとき、僕の腰は悲鳴を上げていた。総重量 30 kg のカヌー一式を背負って駐車場から湖畔にたどり着くだけでもういっぱいだった。

格好つけるのも大変なのだ。

